

Title	江戸漢詩における和漢同情(Abstract_要旨)
Author(s)	胡, 正怡
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2016-03-23
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k19423
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（文学）	氏名	胡正怡
論文題目	江戸漢詩における和漢同情		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>第一章、地名表記から見る漢詩の作り方—古文辞派を中心に—</p> <p>日本の地名を中国の地名に換えたり、あるいは漢語風の地名にすることは、江戸中期の漢詩壇においてひろく行われたことである。このような風潮が、漢詩を作る上にどのような意味を持ったかを明らかにするため、地名の転換が特にユニークな古文辞派の詩を例として検討した。その結果、従来唐詩の模倣として評価の高くなかった古文辞派の地名の使い方に、日本的な発想のあることが確かめられた。</p> <p>まず、ソメイヨシノ発祥の地、江戸の染井村を詠む詩のうち、古文辞派の「蘇迷」と書く詩と、本来の地名のままに「染井」と書く詩を比較すると、仏典に見える仙界「蘇迷盧」の略語「蘇迷」を用いる前者では、その地を深山幽谷のように描く傾向が顕著であり、一方、「染井」と記す詩は、花の色に染まるという表現を取り入れるのが常である。共に、あたかも和歌の縁語のような表現が駆使されるのである。また江戸を漢語風に「燕市」とか「燕台」とか記すことがあるが、「燕市」なら『史記』刺客列伝の荊軻の故事が、「燕台」なら『戦国策』の燕昭王の故事が詩の他の部分に摂取される。連想によって、故事の世界がひろく詩に結ばれるのである。古文辞派の詩は目黒を「驪山」と称するが、その詩では、驪山の神女と秦の始皇帝の故事から、さらに巫山の神女が連想され、雲雨の故事によって表現を飾ることになる。</p> <p>地名を中国風にしたこれらの詩は、縁語を自在に用いることにより、かえって日本的なものとなった。唐詩を模倣することを提唱した古文辞派の詩にも、当時の日本人の感性に合う和歌的な連想が取り込まれたのである。</p> <p>第二章、古文辞派の詩における「和」と「漢」—『伊勢物語』と『楚辞』—</p> <p>この章は『伊勢物語』を例として、古文辞派の詩において日本の古典がどのように使用されたかについて検討し、古文辞派の詩に表れた文学観を明らかにする。</p> <p>唐詩の模倣を強く意識する古文辞派は、実は『伊勢物語』など日本の古典を詩に詠み込むことがあった。杜若洲・墨水（八橋・隅田川）など『伊勢物語』に関係する名所を詠む詩では、王孫と春草という組み合わせが多用される。この組み合わせは、唐詩では極く一般的な表現であり、離情を吟じる際によく使用される。元となった典拠は『楚辞』招隠士である。杜若洲・墨水の詩を創作する際、唐詩に留まらず、古文辞派の詩人は原典である『楚辞』をも意識し、業平と屈原を重ねて理解していたと考えられる。</p>			

つまり、古文辞派は、『伊勢物語』を典拠にしつつ、『楚辞』や唐詩の言葉を使用したものである。このような表現の手法は、和と漢の人情が同じという和漢同情の思想に基づくものと言えよう。和漢同情という文学観が前提としてあれば、理論上、漢詩という枠組みの中に漢の言葉を用いて、和の人情を充分に表現することが可能になると信じたのである。

さらに、和漢同情という観点からみると、古文辞派が唐詩の模倣のような詩を作ることは、ある種の正当性を持っているようにも解釈できる。和も漢も、その根底にある人情が同じであれば、人情を表現するための手段である模倣は、形式通りの漢の人情だけではなく、和の人情をも表現することが可能になる。和漢同情という文学観は、古文辞派の詩を考える上で、必要不可欠の概念であると言えよう。

第三章、古文辞派の詩の注釈的研究—富士説話を中心に—

この章では、『竹取物語』を用いる徂徠の詩を読解した。はじめ『風流使者記』という紀行文に収録された作であり、日本の古典として『竹取物語』をふまえたというよりは、説話や旅行での見聞として「竹取説話」を利用したものである。富士説話を題材とする他の作品や、「聖徳太子説話」を題材とする作なども視野にいれて検討した。

まず徂徠の「都留絹」の詩は、富士浅間説話をもとに、かぐや姫と木華開耶姫を重ね、さらに織女のイメージをも加え、「天孫」という一つの言葉に数人の女神の面影を重ねたものである。また、「駒飼駅」の詩は、聖徳太子の説話を利用しながら、東晋明帝の故事と重ねたものである。つまり、それらは前章で紹介した『伊勢物語』を描写するのに『楚辞』の言葉を利用し、屈原と業平を重ねる詩と同じ手法によるものであり、和漢同情の思想に基づくものだと考えられる。

古文辞派は、日本の古典のみならず、富士説話、浅間説話のような民間説話や、郡内絹の特性などのような旅行での見聞も詩の素材として用いていた。意外にも詩に多様な今風の要素までを取り入れていたのである。唐詩の模倣にこだわった古文辞派が、それとともに、当時の日本を表現しようとした証拠であると指摘できる。

第四章、『白挽歌』翻刻及び解題

漢詩という枠組みに和の人情をも取り入れる例として、古文辞派の詩を和漢同情の観点から検討してきた。しかし一方、漢詩の和訳や、和歌における漢詩文の摂取など、和の枠組みの中に漢の人情を表現しようとする動きもその時代にあった。それも和漢同情を考えるには看過できない問題である。

そこで漢詩和訳の中で、『白挽歌』という書物を取り上げ、第四章にその『白挽歌』の翻刻と解題を掲げ、第五章はそれを利用し、その内容を具体的に検討する。

『白挽歌』とは、『唐詩選』所収の五言絶句を白挽歌という七七七五の俗謡形式に訳したものであり、『唐詩五絶白挽歌』、『唐絶和訓』、『唐詩選粉挽調』などと呼ばれている。

る。作者中島魚坊は石見の俳人で、芭蕉の後人にあたる人物である。

先行研究によって紹介された『臼挽歌』の諸本は三つある。唯一の刊本佐用本（焼失）と、岡山大学小野文庫所蔵の小野本と静嘉堂文庫所蔵の静嘉堂本の三つである。本章は、文化年間写の小野文庫蔵本と、新発見の明治四年写の架蔵本の本文を底本として用いて、『唐詩選』享受、またはその時代を反映する研究資料として研究価値のあるこの資料を翻刻した。

第五章、『唐詩選』の俗謡訳 ―子夜春歌の訳と『臼挽歌』―

本章では漢詩和訳、特に俗謡形式のものから和漢同情という概念を考える。最初に子夜春歌の和訳を江戸の『唐詩選』注釈書と照らし合わせ、それが『唐詩選国字解』に類似していることから、古文辞派と何らかの関係を持つことがわかる。

次に、子夜春歌の訳の体裁に倣った『臼挽歌』も江戸の『唐詩選』注釈書と比較した結果、『唐詩児訓』の注に見られる特徴的な言葉が、『臼挽歌』にも見られる。そのことから、『臼挽歌』における『唐詩児訓』からの影響が指摘できる。

また、『臼挽歌』を訳す際に、中国地名を日本の地名に書き換えたり、中国の人物を日本の人物にしたりするように、訳文をより日本的にする傾向が見られる。例えば梅の名所である「江嶺」を、同じ梅の名所の「難波」に訳し、俠者である「劇孟」を男伊達の「文七」に訳す。戦場を描く詩では「桔梗ヶ原」、「不破の関」という古戦場を訳詩に入れる。

『臼挽歌』は唐詩の和訳であるが、形式も内容も江戸当時の流行を反映するものである。その七七七五の形は、当時流行の潮来節や都都逸節などの調子であり、固有名詞の書き換えに用いられる「難波」「桔梗ヶ原」「文七」などの言葉も、当時の人が慣れ親しんだものばかりである。

『臼挽歌』の作者である中島魚坊は古文辞派と直接につながりをもたない人だが、その時代背景には古文辞派の影が見られる。そもそも原文である『唐詩選』は服部南郭が出版して人気を博したものであり、『臼挽歌』の手本となる子夜春歌の俗謡訳も古文辞派と関係するものであった。中国の地名を日本の地名にし、中国の人物を日本の人物にする手法も、第一章で検討した古文辞派の漢詩の作り方とは、方向としては反対のものだが、発想としては共通するところがある。

中島魚坊は漢詩という「雅」の代表を、日本の俗謡という親しみのある「俗」へと変えた。それができたのもやはり和漢同情という考え方が背景にあったからであろう。

（論文審査の結果の要旨）

日本の詩文思潮の変遷は、中国の文学のそれをおよそ二百年遅れて追うと言われる。江戸時代中期の荻生徂徠、服部南郭らの護園派の文学論も例外ではない。十六世紀初頭、明の古文辞派の唱えた「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」は、秦漢の文、盛唐の詩を規範とし、踏襲することによって、自らの作にそれらの詩文の格調を得ようとする主張であったが、その復古論を受容した護園派の詩論は、十八世紀の日本の知識人の圧倒的な支持を受け、時の漢詩壇を席卷したと伝えられる。

しかし、その隆盛も、擬古の詩として避けようのない模擬剽窃、陳腐雷同が指摘され、人の真情、世の実情を表現しえないことが非難されるようになり、短命に終わった。江戸時代が秦漢の世ではなく、江戸の人が盛唐の人でない以上、模擬の方法には無理があった。替わって興った清新性霊派の詩人たちが、ありのままの人の心、身の生活のさまを詠い、詩文を日本近世の現実近づけ、日本の風土に根付かせることに成功したと評価されることがあるのに比べ、古文辞派の詩は、社会から乖離した偽唐詩として軽んじられるようになった。今日の研究者がそれに関心を寄せることもほとんどない。

本論文は、その護園派の文学の再評価を試みる。盛唐詩を目指したはずのその詩に日本的な要素が見られることに着目し、それが日本文学としての性格をもつことを論じる。そして、その和漢混淆の背景に和漢同情という思想があったことを指摘する。それにより、日本の古文辞派と中国古文辞派との重要な相違点が明らかにされる。

第一章は、護園派の詩に日本の地名が詠みこまれる例をとりあげる。「詩は必ず盛唐」という主張から、その詩において日本の地名は必ず中国風に変えられる。「牛込」は「牛門」に、「目黒」は「驪山」に、あたかも盛唐詩に見られるかのような地名に変換される。その中で、ソメイヨシノ発祥の地、江戸の染井村を「蘇迷」と記す例を取り上げた論者は、それが仏典に見える仙界「蘇迷盧」の略語であること、そして、詩の他の部分にその「蘇迷」という地名のイメージから連想された「雲」「山」「桃源」などの語が用いられ、実際は平坦な土地であるにもかかわらず、深山幽谷に迷い込むような内容が詠われることを指摘する。地名「染井」をそのまま用いる同時代の詩が、詩中に花の色に染まるという表現を取り入れるのと、それは同様の表現法である。つまりは和歌の縁語に似た表現が駆使されるのである。また江戸を漢語風に「燕市」とか「燕台」とか記すことがあるが、「燕市」なら『史記』刺客列伝の荊軻の故事が、「燕台」なら『戦国策』の燕昭王の故事が詩の他の部分に摂取される。それぞれの故事の世界が、連想によって詩中に繰り広げられる。

地名を中国風にするのは盛唐詩の模倣であるが、その中国風の地名からの連想語を詩中にちりばめるのは、和歌の縁語表現にも通じる方法であった。和習をもっとも嫌った護園派文人たちの詩に和歌的表現が見られるというこの意外な指摘は、日本文学史上に彼らの詩文を位置づけるための新たな視点を提示するものとして高く評価できるであろう。

第二章は『伊勢物語』を題材とする護園派の詩を取り上げる。東下りする「昔男」の訪

れる「八橋」、「隅田川」は、それらの詩では唐詩風に「杜若洲」、「墨水」などに変えられる。そのみならず、「昔男」は「王孫」と称されて、『楚辞』招隠士の「王孫遊びて帰らず、春草生じて萋萋たり」の句に基づく表現が繰り返し用いられる。つまり、それらの詩は、「昔男」と「屈原」とを、高貴な血をひく文才ある美男子でありながら、都を追われて流浪した人として重ね、「昔男」を「屈原」その人であるかのように表現したのである。論者は、「昔男」と「屈原」を重ねることがそこで可能とされたのは、日本と中国の人の心は同じであるという和漢同情の思想が詩人たちにあったからだと論じる。たしかに、和漢の情が異なると考えるなら、日本における漢文学は成立の基盤を失う。和漢同情であるからこそ、漢語によって日本の人の心が表現できるはずである。つまり「屈原」の故事によって「昔男」を表現できることになる。

その背景に和漢同情の思想があったことの発見は、日本古文辞派の文学を明らかにするためのもう一つの重要な視点を提供するものであった。第三章、徂徠の竹取説話をふまえる詩の分析、また第五章、漢詩和訳の問題についての考察においても、この和漢同情論への着目が極めて有効であることが確かめられた。

惜しむらくは、その和漢同情論の発生、展開が論者自身によって丁寧に辿られていないことである。漢学者にとって自明のこととされ、ことさらに議論されることの少なかった和漢同情論は、日本思想史学においても十分な研究がなされていない。その探究は、論者にとって、今後の大きな課題となるものであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十八年一月二十五日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第十四条第二項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。